

過去ぎょうぼうぼんじに樂法梵志と申す者ありき。十二年の間、多くの国をめぐりて如来の教法を求む。時に総て仏法僧の三宝一つもなし。此の梵志の意は渴して水をもとめ、飢ゑて食をもとむるがごとく仏法を尋ね給ひき。時に婆羅門ぼらもんあり。求めて云はく、我聖教しょうぎょうを一偈持てり。若し実に仏法を願はゞ当にあたふべし。梵志答へて云はく、しかなり。婆羅門の云はく、実に志あらば皮をはいで紙とし、骨をくだいて筆とし、髓をくだいて墨とし、血をいだして水として書かんと云はゞ仏の偈を説かん。時に此の梵志悦びをなして彼が申すごとくして、皮をはいでほして紙とし、乃至一言をもたがへず。時に婆羅門こつねん忽然として失せぬ。此の梵志天にあふぎ、地にふす。仏陀此を感じて下方より涌出て説いて云はく「如法は応に修行すべし、非法は行ずべからず、今世若しは後世、法を行ずる者は安穩なり」等云云。此の梵志須臾しゅゆに仏になる。此は二十字なり。

昔、釈迦菩薩てんりんおう轉輪王たりし時「夫生まれて輒ち死す、此の滅を樂と為す」の八字を尊び給ふ故に、身をかへて千灯せんとうにともして此の八字を供養し給ひ、人をすゝめて石壁要路にかきつけて、見る人をして菩提心をおこさしむ。此の光明とうりてん切利天に至る。天の帝釈並びに諸天の灯ともしびとなり給ひき。昔、釈迦菩薩らいにん仏法を求め給ひき。癩人あり。此の人にむかつて我正法を持てり。其の字二十なり。我が癩病をさすり、いだき、ねぶり、日に両三斤ぎんの肉をあたへば説くべしと云ふ。彼が申すごとくして、二十字を得て仏になり給ふ。所謂いわゆる「如来は涅槃を証し永く生死を断じたまふ。若し至心に聴くこと有らば当に無量の樂を得べし」等云云。

昔雪山童子せつせんどうじと申す人ありき。雪山と申す山にして、外道の法つうだつを通達せしかども、いまだ仏法をきかず。時に大鬼神ありき。説ひて云はく「諸行無常是生滅法」等云云。只八字計りを説いて後をとかず。時に雪山童子此の八字をえて悦びきわまりなけれども、半ばなる如意珠をえたるがごとく、花さきて菓このみならざるにいたり。残りの八字をきかんと申す時、大鬼神の云はく、我数日が間飢饉して正念を乱る。ゆへに後の八字をときがたし。食をあたえよと云云。時に童子問うて云はく、なにをか食とする。鬼神答へて云はく、我は人のあたゝかなる血肉なり。我飛行自在にして、須臾ひぎょうの間に四天下を回ってたづぬれども、あたゝかなる血肉得がたし。人をば天まぼり給ふゆへに失なければ殺害する事かたし等云云。童子の云はく、我が身を布施として彼の八字を習ひ伝へんと云云。鬼神云はく、智慧はなは甚だ賢し。我をやすかさんずらん。童子答へて云はく、瓦礫がりやくに金銀をかへんに是をかえざるべしや。我徒いたずらに此の山にして死しなば、鷓鴣しきょう梟ころう虎狼に食らはれて、一分の功德なかるべし。後の八字にかえなば糞を飯にかふるがごとし。鬼の云はく、我いまだ信ぜず。童子云はく、証人あり。過去の仏もたて給ひし大梵天王・釈提桓因・日・月・四天も証人にたち給ふべし。此の鬼神後の偈をとかんと申す。童

子身にきたる鹿の皮をぬいで座にしき、^{こき}踞跪合掌して此の座につき給へと請^{しょう}ず。大鬼神此の座について説ひて云はく、「生滅滅已寂滅為樂」等云云。此の偈を習ひ学して、若しは木若しは石等に書き付けて、身を大鬼神の口になげいれ給ふ。彼の童子は今の釈尊、彼の鬼神は今の帝釈なり。

薬王菩薩は法華經の御前に^{ひじ}臂を七万二千歳が間ともし給ひ、不輕菩薩は多年が間二十四字のゆへに無量無辺の四衆に罵詈毀辱・杖木瓦礫・而打擲之せられ給ひき。所謂二十四字と申すは「我深く汝等を敬ふ敢て輕慢せず所以は何かん汝等皆菩薩の道を行じて当に^{さぶつ}作仏することを得べし」等云云。かの不輕菩薩は今の教主釈尊なり。昔の須頭檀王は妙法蓮華經の五字の為に千歳が間阿私仙人にせめつかはれ、身を床となさせ給ひて今の釈尊となり給ふ。

然るに妙法蓮華經は八卷なり。八巻を読めば十六巻を読むなるべし、釈迦多宝の二仏の經なる故へ。十六巻は無量無辺の巻軸なり、十方の諸仏の証明ある故に。一字は二字なり、釈迦多宝の二仏の字なる故へ。一字は無量の字なり、十方の諸仏の証明の御經なる故に。譬へば如意宝珠の玉は一珠なれども二珠乃至無量珠の財をふらすことこれをなじ。法華經の文字は一字は一の宝、無量の字は無量の宝珠なり。妙の一字には二つの舌まします、釈迦多宝の御舌なり。此の二仏の御舌は八葉の蓮華なり。此の重なる蓮華の上に宝珠あり、妙の一字なり。此の妙の珠は昔釈迦如来の檀波羅蜜と申して、身をうえたる虎にかひし功德、鳩にかひし功德、尸羅波羅蜜と申して須陀摩王としてそらごとせざりし功德等、忍辱仙人として歌梨王に身をまかせし功德、能施太子・尚闍梨仙人等の六度の功德を妙の一字にをさめ給ひて、末代惡世の我等衆生に一善も修せざれども六度万行を満足する功德をあたへ給ふ。「今此三界、皆是我有、其中衆生、悉是吾子」これなり。我等具縛の凡夫忽ちに教主釈尊と功德ひとし。彼の功德を全体うけとる故なり。經に云はく「如我等無異」等云云。法華經を心得る者は釈尊と齊等なりと申す文なり。譬へば父母和合して子をうむ。子の身は全体父母の身なり。誰か是を諍ふべき。牛王の子は牛王なり。いまだ師子王とならず。師子王の子は師子王となる。いまだ人王天王等とならず。今法華經の行者は「其中衆生、悉是吾子」と申して教主釈尊の御子なり。教主釈尊のごとく法王とならん事難かるべからず。但し不孝の者は父母の跡をつがず。堯王には丹朱と云ふ太子あり。舜王には商均と申す王子あり。二人共に不孝の者なれば、父の王にすてられて現身に民となる。重華と禹とは共に民の子なり。孝養の心ふかゝりしかば、堯舜の二王召して位をゆづり給ひき。民の身忽ちに玉体にならせ給ひき。民の現身に王となると凡夫の忽ちに仏となると同じ事なるべし。一念三千の肝心と申すはこれなり。

而るをいかにとしてか此の功德をばうべきぞ。樂法梵志・雪山童子等のごとく皮をはぐべきか、身をなぐべきか、臂をやくべきか等云云。章安大師云はく「取捨宜しきを得て一向にすべからず」等これなり。正法を修して仏になる行は時によるべし。日本国

に紙なくば皮をはぐべし。日本国に法華經なくて、知れる鬼神一人^{しゅつたい}出来せば身をなくべし。日本国に油なくば臂をもともすべし。あつき紙国に充滿せり。皮をはいでなにかせん。然るに玄奘^{げんじょう}は西天に法を求めて十七年、十万里にいたれり。傳教御入唐但二年なり、波濤三千里をへだてたり。此等は男子なり、上古なり、賢人なり、聖人なり。いまだきかず女人の仏法をもとめて千里の路をわけし事を。竜女が即身成仏も、摩訶波闍波提比丘尼の記莚にあずかりしも、しらず権化にやありけん。又在世の事なり。男子女人其の性本より別れたり。火はあたゝかに水はつめたし。海人は魚をとるにたくみなり。山人は鹿をとるにかしこし。女人は淫事にかしこしとこそ經文にはあかされて候へ。いまだきかず、仏法にかしこしとは。

女人の心を清風に譬へたり。風はつなぐともとりがたきは女人の心なり。女人の心をば水にゑがくに譬へたり。水面には文字とどまらざるゆへなり。女人をば誑人^{おうにん}にたとえたり。或時は実なり或時は虚なり。女人をば河に譬へたり。一切まがられるゆへなり。而るに法華經は正直捨方便等・皆是眞実等・質直意柔軟等・柔和質直者等と申して、正直なる事弓の絃のはれるがごとく、墨のなはをうつがごとくなる者の信じまいらす御經なり。

糞を梅檀と申すとも梅檀の香なし。妄語の者を不妄語と申すとも不妄語にはあらず。一切經は皆仏の金口の説不妄語の御言^{ことば}なり。然れども法華經に対しまいらすれば妄語のごとし、綺語のごとし、悪口のごとし、兩舌のごとし。此の御經こそ実語の中の実語にて候へ。実語の御經をば正直の者心得候なり。

今実語の女人にておはすか。当に知るべし、須弥山をいたゞきて大海をわたる人をば見るとも、此の女人をば見るべからず。砂をむして飯となす人をば見るとも、此の女人をば見るべからず。当に知るべし、釈迦仏・多宝仏・十方分身の諸仏・上行無辺行等の大菩薩・大梵天王・帝釈・四王等、此の女人をば影の身にそうがごとくまぼり給ふらん。日本第一の法華經の行者の女人なり。故に名を一つつけたてまつりて不輕菩薩の義になぞらえん。日妙聖人等云云。

相州鎌倉より北国佐渡国、其の中間一千余里に及べり。山海はるかにへだて、山は峨々^{がが}海は濤々^{とうとう}、風雨時にしたがふ事なし。山賊海賊充滿せり。すくすくとまりとまり民の心虎のごとし犬のごとし。現身に三惡道の苦をふるか。其の上当世の乱世、去年より謀叛の者国に充滿し、今年二月十一日合戦、其れより今五月のすゑ、いまだ世間安穩ならず。而れども一の幼子あり。あづくべき父もたのもしからず。離別すでに久し。かたがた筆も及ばず、心弁^{わきま}へがたければとゞめ了んぬ。

文永九年^{太歲壬申}五月二十五日

日 蓮 花 押

日 妙 聖 人